

だれでも、人格の基礎となる資質——正直さや同情心や勇気や忍耐などについて、同じように敬意を払います。まさしくそれらが「徳」なのです。しかし、子どもたちはあらかじめ、これらの知識をもって生まれてくるわけではありません。だからこそ「徳とは何か？」を学ぶ必要があるのです。「徳」の物語を与えれば、彼らはそれを理解し、評価できるようになるでしょう。いろいろな物語や歴史的な出来事、有名人の逸話を通して、「徳」の理解を深め、判断できるようになるのです。世の中には、子どもたちにぜひ読んでもらいたい、実に数多くの素晴らしい「徳」や「墮落」の物語があります。この本は、それらの中でも最も素晴らしい、最も古い、最も感動的な物語を選びすぐって集めています。残念なことに、子どもたちは、これらの作品をほとんど知らないでしょう。なぜなら、教える習慣がなくなってしまったからです。

【男の子と木の実】……………イソップ

欲望をコントロールしたほうがよい一つの理由は、あまりたくさんを望むと、何も得られないことがあるからだ。

あるとき、小さな男の子がテーブルの上に木の実が入ったビンがあるのを見つけました。「あの木の実が欲しいな。お母さんはもちろんぼくにくれるに違いないから、たくさんもらっちゃっていいな」と男の子は考えました。そこでビンに手を突っ込み、できるだけたくさんの木の実をつかみました。ところがビンから手を出そうとすると、つかえて出せません。ビンの口が狭すぎるのです。それでもこの子は手をしっかりと握っていました。木の実を一つも落とさなかったのです。男の子は何度も何度も手にいっぱいの木の実を取り出そうとしましたが、どうしてもできません。そしてとうとう泣き出しました。ちょうどそのときお母さんが部屋に入ってきました。「どうしたの？」とお母さん。「木の実をビンから出せないんだ」と泣きながら男の子が言いました。「欲張るのはやめなさい。二つか三つ取ればいいでしょう。そうすれば手は簡単に出来ますよ」「なんだ、簡単だ」と言いながら男の子はテーブルを離れました。そして「自分で気がつけばよかったな…」と思いました。

【蛙と井戸】……………イソップ

賢明な人は、跳ぶ前によく考える。

二匹の蛙が一緒に沼地に住んでいました。でも、ある暑い夏、沼地が乾燥したので、新しく住む場所を探しはじめました。蛙は湿気の多い土地を好むのです。住むところを探しているうちに、二匹の蛙は深い井戸を見つけました。一匹の蛙は暗い底をのぞき込み、「冷たくて気持ちよさそうだよ。飛び込んでここに住もうか?」と言いました。しかし、もう一匹の少し頭のよい蛙が言いました。「急ぐなよ。もしもこの井戸が沼地のように乾燥したら、どうやって井戸から出るんだよ?」

行動を起こす前には、もう一度考えること。

【魔法の糸】フランスの寓話

銀色のボールから金色の絹糸が垂れている。

…「これはおまえの人生の糸だよ」とおばあさんは答えました。「糸にさわらなければ、時間はふつうに過ぎていくよ。でも、もしも、もっと時間が早く過ぎて欲しいなら、この糸を少しだけひっぱるのさ。そうすると一時間が一秒のように過ぎ去ってしまう。だけど注意をしておくよ。一度ひっぱった糸は決してもとにはもどせないからね。ひっぱった糸は煙のように消えてしまうのさ。さあ、ボールはおまえのものだ。でもこの贈り物のことをだれにもしゃべってはいけないよ。しゃべった日に、おまえは死ぬことになる。さあ、このボールが欲しいかい？」

ピーターは大喜びでこの贈り物を受け取りました。

…

「ピーター、いい人生を送ることができたかい？」と彼女は聞きます。

「どうかな……」とピーターは答えました。「たしかに魔法のボールは素晴らしいものです。苦しいことはみんな避けてこれたし、待たなくても欲しいものが手に入りました。でも人生はあまりにも早く過ぎ去ってしまったような気がします。自分に起こったことを……それがよいことでも悪いことでも……心に染み込ませる時間がなかったような気がするのです。もう残された時間が少ないので糸をひくこともできません。死が早まるだけです。あなたの贈り物が、私に幸運をもたらしてくれたとは思えないのです」

「おやおや、恩知らずな人だね!どんな人生だったら満足できたのかね？」とおばあさんは聞きます。

「たぶん、別のボールだったらよかったかもしれません。糸をひっぱるだけでなく、もどすことができるボールだったら……そうしたら、人生の苦しいときをもう一度経験できたでしょうから……」

おばあさんは笑いました。「注文の多い人だね!神様が人生を二度もくり返させてくれると思うかい？」

【人にはどのくらいの土地が必要か?】 ----- ・----- ・-- トルストイ
欲望には、明瞭な境界線を引かねばならないのだ。

「それで、おいくらですか?」とパホム。

「価格はいつも同じでね。一日一〇〇〇ルーブルだ」

パホムにはさっぱり理解できません。

「一日?それはどんな単位ですか?何エーカーになるのですか?」

「さあ、それははっきりわからんな」と首長。「いつも一日単位で売るんでね。一日中歩いて囲えた土地が、あなたの土地になるんですよ。だから価格は一日一〇〇〇ルーブルです」

パホムは驚きました。

「でも、一日だったら、莫大な土地になりますよ」とパホムは言いました。

首長は笑いました。

「すべてあんたのものだよ!だが一つだけ条件がある……一日のうちに、出発したところにもどってこなかったら、お金は没収されるんだよ」

「しかし、私が通った道はどうやって印をつけるのですか?」

「ああ。一緒に好きなところに出かけ、そこでわれわれは待っているよ。あんたはそこからスタートして、土地を囲むんだ。土地を耕す鋤(すき)を持ってね。必要だと思うところには印をつけて、方向を変えるところには穴を掘り芝を積み上げるんだ。われわれも後から鋤を持って穴から穴へと回るよ。好きなだけ大きな囲いを作っていいわけだ。囲った土地はすべてあんたのものだ。だが、太陽が地平線に隠れるまでにはスタートしたところにもどってこなければいけない」

…(皮算用)…

パホムは小山を見て、太陽を見ました。まだまだ目的地までの距離はだいぶあるのに、太陽は地球の縁に近づいています。

パホムは必死で歩きました。苦しくてもどんどん速度を上げました。それでも、目的地はまだ遠くです。パホムは走り出しました。コートを脱ぎ捨て、水筒も捨て、帽子も脱ぎ捨てたのです。手には鋤を持っていましたが、これで身体を支えたのです。

「どうしたらいいんだ」とパホムは思いました。「欲張りすぎて、すべてを無駄にしそうだ。太陽が沈む前にはとてももどれそうもない……」

そう思ったパホムはさらに必死になり、走り続けたのです。汗で濡れたシャツやズボンが身体にくっつき、口は乾ききっています。胸は鍛冶屋のふいごのように働いており、心臓は早鐘のように鳴り、足は身体の一部ではないかのように勝手に動きます。パホムは恐れおののきました。無理をしすぎて死ぬのではないかと思ったのです。

死ぬのは恐ろしかったのですが、それでも止まることはできません。

「ここまで走ってきたのに、ここで止まったら馬鹿にされてしまう」とパホムは思いました。

…

パホムは大きく一息つき、小山を駆け登りました。小山の上にはまだ陽が当たっています。パホムは頂上に到達して帽子を見ました。帽子の前には首長が座っており、両手を腰にあてて大笑いをしています。パホムは小さな叫び声をもらし、足がもつれ、前に倒れながら両手で帽子を押さえました。

「すごい男だ!」と首長は叫びました。「すごい土地を囲った!」

パホムの召使いが駆け寄ってパホムを抱き起こそうとしました。ところがパホムの口からは血が流れ出ているのです。パホムは死んでいたのです!

【プラトンによる「自己規律」】-----・-・-・-----ゴルギギアスより

カリクレスの意見;「よい生活とは、欲しいものが、好きなときに、欲しだけ手に入ること」。簡単に言うと、金持ちで有名な人々の生活こそ、真に幸福な生活だというのだ。

これに対しソクラテスは、不節制な人を、水の漏れる樽にたとえて返答する。ソクラテスは、[節度ある心をもつ人だけが、幸せな生活を送れる](#)というのだ。

ソクラテス:あなたの自由な議論の仕方は本当に素晴らしいね、カリクレス。あなたの言うことは、ほとんどの人々が考えているが、口に出して言うのをためらっていることだ。この議論をもっと続けていただきたい。そうすれば人生の真の法則がわかってくるかもしれないからだ。そこでうかがいたいのだが、正しく成熟した大人は、欲情を抑えてはいけないと言うのだね?むしろ激情を最大に高め、それらを何らかの方法で、できるかぎり満足させろ、それが美德だというわけだね?

カリクレス:そのとおりだ。

ソクラテス:そうなると、欲をもたない人は、必ずしも幸せとは言えないわけだね。

カリクレス:もちろんだ。石や死人が幸福であるわけがない。

ソクラテス:しかし、あなたの見方による人生はあまりよいものとも思えないね……それでは節制する人と不節制な人の例をあげるから、どこまで納得がいくか考えてみてほしい。二人の人物がいた。二人ともいくつかの樽をもっている。一人の樽はみな頑丈で満杯だ。一つにはワイン、一つには蜂蜜、三つ目にはミルク、そして他の樽には別の飲み物などが満杯だ。しかしこの樽に流れ込む量はわずかである。しかもその少ない流れを得るのは骨の折れる仕事で、苦勞しなければならぬ。しかし一度樽を満杯にしたら、もうそれ以上貯める必要もなければ、何もする必要がない。もう一人の場合は、流れは豊富で苦勞はないが、樽は漏れて頑丈ではない。そこで昼夜わかつたず、いつも樽に液体を流し込まなければならぬ。少しでも休むと、いらいらし苦悶してしまう。この二人の人物の人生はこのようなものだ。これでもあなたは不節制な人生のほうが、節制を保った人生よりも幸福だというのか?この例は、その反対が真理だと確信させることにはならないだろうか?

カリクレス:ソクラテスよ、とてもそんな確信はもてないね。樽を満杯にした人は、その後に楽しみがなくなるじゃないか。そのような生活こそ、今、私が述べた石のような生活なんだ。樽を満杯にしてしまったら、喜びも悲しみもないわけだ。喜びというのは、有り余る富の流れにあるのだ。

ソクラテス:だが、流し込めば込むほど、無駄も増えてしまうし、流れ出る樽の穴も大きくなる。

カリクレス：もちろんそうだ。

ソクラテス：あなたが描いた人物というのは死人でもないし、石でもなく強欲者になる。満腹であるよりも、腹をすかせて食べるほうがよいというのだね？

カリクレス：そうだ。

ソクラテス：となると、のどを渴かして呑むわけだ？

カリクレス：そうだ。そのとおりだ。多くの欲望をもたねばならない。幸福に生きるということは、その欲望を満足させることにあるからだ…。

ソクラテス：それなら聞いて欲しい。もう一度、この議論を要約してみよう。快樂と善とは同じことだろうか？同じではない。この点についてあなたと私の意見は一致している。さてそれでは、快樂を追求するのは善のためだろうか……それとも快樂のために善が追求されるのだろうか？もちろん快樂を追求するのは善を実現するためだ。楽しいから快樂になり、善いことをするから善になるのではないだろうか？われわれは善だし、われわれの中に徳があればすべては善になるのではないか？カリクレスよ、私はそうだと確信している。肉体であろうと魂であろうと、道具であろうと生物であろうと、それぞれの徳というのは、自然に発揮されるのだ。それは偶然ではなく、その中にある秩序と真理と道理に基づくのだ。そうではないだろうか？私はそうだと思う。またそれぞれに備わる徳というのは秩序や組み合わせによるのではないだろうか？そうだと私は思う。そこで善いということはそれぞれに備わる正しい秩序ではないだろうか？それが私の考えだ。そこで自分自身で秩序をもつ魂は、まったく秩序がない魂よりも優れているのではないか？当然のことだ。秩序をもつ魂というのは規律があるのか？もちろんだ。秩序があることは節度を保つことではないか？まちがいない。節度のある魂は善ではないか？、それ以外に答えはないと思うがどうだろうか、カリクレスよ。意見があるだろうか？

カリクレス：友よ、続けてくれ。

ソクラテス：それではさらにつけ加えよう。節度を保つ魂が善い魂なら、その反対にある魂、つまり思慮がなく不節制な魂は、悪い魂だということになる。まさにそのとおりなのだ。節度を保てる人間は、神に対しても人に対しても、正しいことを行うだろう。そうでなければ節度がないからだ。節度ある人は正しいことを行う。人に対しては正義を行い、神に対しては聖なることを行う。このように正義を行い聖なることをする人は、聖なる人ではないか？さらに勇氣もあるのではないだろうか？節度ある人の義務は、やるべきでないことを避けるだけでなく、やるべきことを行うことだ。すべきことがあれば、それがどんな仕事でも、またどんな人に対してでも、楽しくても辛くても、忍耐強く行うのだ。

したがってカリクレスよ、今述べたような節度がある人は、正義の人であり、勇氣もあり聖なる人であり、完璧な善の人ではないだろうか。善の人は何をするにおいても、首尾よく完璧に行うのではないだろうか。何でも首尾よくできる人は幸せで、祝福されるだろう。一方、邪悪な人は邪悪なことを行い、悲惨になる。この邪悪な人をあなたは賛美していたのだ。不節制で、節度がある人とは反対の人だ。これが私の立場だし、これまで述べたことは真実だと思っている。もしもこれらが真実なら、幸福になりたい人は、節度を求め、節度ある生活を実践しなければならぬし、不節制からはできるかぎりの速さで逃げなければいけない。人は生活に秩序をもたなければいけない。そうすれば罰せられることもない。だが、だれでも、たとえ友人でも、それが個人であれ都市であれ、罰せられるべきならば、正義が行われて罰せられねばならない。それが幸せにつながる。これが人間がもつべき目標ではないかと私は考える。したがって個人も国家もこの方向に向かってそのすべてのエネルギーをそそがねばならない。節度と正義を実行し幸せになる。欲望に任せてはいけない。欲望を満たそうとすると限度がなくなり、泥棒の生活をするようになる。そのような人は神の友でもなく人の友でもない。なぜならそのような人は、他の人と交わることができない。人と交わることができない人には友情も生まれない。哲学者は言っている、カリクレスよ。人と交わること、友情、秩序、節度、正義が天と地と神と人とを束ねるのだと。この宇宙はコスモスと呼ばれるが、それはすなわち秩序であり、無秩序や無規則ではないのだ、友よ。

【大金持ちのクロイソス】ギリシャの歴史家ヘロドトスによる物語。

「人が本当に幸福かどうかは、その人間が死ぬまでわからない。どのような災いが訪れるかはだれにもわからないし、このような栄華に代わって、どのような不幸がふりかかるかもわからない」→財宝や権力がどれほど幸福と関係があるのかについての教訓が含まれている。

【無口な夫婦】……………

あるところに、街で一番の頑固者と言われた若者と、最も強情と言われた若い女がおりましたが、驚いたことに、二人は恋におちて結婚しました。結婚式のあと、新居で盛大な祝宴が開かれ、一日中続きました。

やがて友達も親戚もみな満腹になり、一人また一人と家路につきました。新郎新婦はへトヘトに疲れて、靴を脱いでくつろごうとしていました。そのとき、最後の客がドアをきちんと閉めていないことに夫が気づきました。

「なあ、おまえ」と夫が言いました。「ちょっとドアを閉めてきてくれないかな。すきま風が入ってくるから」

「どうして私が閉めなきゃいけないのよ？」と、あくびをしながら、妻が答えました。「一日中立ちっぱなしで、やっと座ったばかりよ。あなたが閉めなさいよ」

「そらきた!」と、夫は切り返しました。「結婚指輪をはめたとたん、忘れ者の役立たずになるんだよな!」

「よくもそんなことが言えるわね!」と妻が叫びました。「私たち、結婚してからまだ一日もたっていないのに、もうあなたは私をののしり、あごで便おうとするのね!あなたがこんな夫になるなんて、思ってもみなかったわ!」

「がみがみとうるさいなあ。おまえの文句を、おれは永遠に聞かなきゃいけないのか?。」

夫がぼやくと、妻がやり返しました。

「そして、私はあなたの小言と愚痴をいつも聞かなきゃいけないわけ?。」

二人は、たっぷり五分間、お互いにらみ合っただけで座っていました。すると、ある考えが妻の頭に浮かびました。

「ねえ、あなた。私たちはどちらもドアを閉めに行きたくないのだし、どちらも相手の声を聞くのにうんざりしてるのよね。だから、ここで勝負をしましょう。先に口を利いたほうが、ドアを閉めに行くのよ」

「そいつは今日一番のいい考えだ」と夫は請けあいました。「さっそくはじめよう」

こうして二人はゆったりと椅子に腰かけ、一言もしゃべらずに顔をつき合わせました。

…(泥棒がまったくだれもいない様子の中にも忍び込み、…

…(警官)…

「警察だ!おまえたちは何者だ?ここはおまえたちの家か?家具はどうしたんだ?」けれども、なおも返事はありません。警官は手をあげ、夫の耳を殴りつけました。

「やめて!」と妻は飛び上がって叫びました。

「これは私の夫よ。この人に手を触れようものなら、承知しないわよ!」

「勝った!」と夫は手をたたきながら叫びました。「さあ、おまえが行ってドアを閉めて来るんだ」

●友情

・よい物語は、人の身になって考えることを教えてくれる。それは、道徳的な考え方を身につける重要な手段だ。友情についての物語は、友人の身になって物事を考え、他人を本気で受けとめることを教えている。最も清らかな形の最高の友情とは、おそらくすべての人間関係にとっての模範だろう。

・この章で紹介する作品からもわかるように、友情とは、知り合いであること以上のものであり、やさしい思いよりも深いものが存在する。友情はふつう、共通の興味や目的から生まれ、次第に好意的な衝動が生まれ、興味や目的の追求を強めていく。友情に必要なのは、率直さや、たゆまざる自己表現であり、友人からの批判を、賞賛やほめ言葉と同様に真剣に受けとめ、自己犠牲ともとれるまでの援助をすることだ。これらすべてが、道徳的な成熟、ひいては品性の向上を促す強力な刺激となる。

・現代では、いとも簡単にちょっとした知り合いとなることができ、あまりにも早く、あまりにも手軽に親密さ

が手に入る。そのような時代に生きる私たちは、本物の友情が成立するには、時間がかかるということを思い出さなければならない。本物の友情を築くには骨が折れ、友情を保つには努力がいるのだ。友情とは深遠なものである。それは、ひとつの愛の形でもあるのだ。

・親はみな、どんな友達を選ぶかが、子どもにとって非常に大切であることを知っている。幼年時代の友情は、子どもがどのような方向に向かっていくかを親に教えてくれる。よい友人は人を育てるが、悪い友人は人を墮落させてしまう。したがって、自分の子どもがどんな友人をもつかは、とても重要なのである。

●仕事

・大人になったら何になる?これは、仕事に関する問いかけだ。この世において何をするつもりなのか?何を仕事とするのか?これは根本的に、職業とか給料ではなく、人生についての問いかけだ。

・仕事とは目的のために努力することだ。何かの完成と達成に向けて身を捧げる。エネルギーを費す対象は、すべて仕事だ。こうした考えに立てば、仕事は生活の「手段」ではなく、人生の使い方である。

・仕事の反対は、余暇や遊びや楽しむことではなく、怠惰つまり前向きに没頭する対象がない状態である。睡眠ですら、将来の活動のためなら、仕事の一部だ。だが新たにエネルギーを生むためでなく、ただウトウトと惰眠する場合は、気晴らしと同じように逃避ともなりうる。一方、余暇や遊びを楽しむ場合はそれに没頭せざるを得ないので、時間の混費にはまったくならない。

・われわれは、子どもたちが実り豊かで楽しく順調な人生——つまり幸福な人生を送るようにと願う。

幸福になるには、やり遂げたときに誇りを感じられるような活動をするとよい。そうすれば活動自体を楽しめるようになる。楽しむことを、ただの気晴らしや骨休めや娯楽と同じ、と見るのは大きなまちがいだ。人生最大の楽しみは、仕事を離れたところにあるのではない。人生における仕事にあるのだ。仕事の楽しみや労働の成果の喜びを知らない人は、とても大切な何かを喪失しているのだ。

それは子どもたちにもあてはまる。子どもの幸せを願うとき、われわれは彼らが人生を楽しむことを願っている。世の中でよい仕事を見つけ、楽しんで欲しいと思っている。

・ではどうすれば、子どもたちに楽しい人生を準備してやれるのか?ここでも鍵を握るのは、実践と手本だ。まず、いろいろなことをやってみる。それらは、没頭したり努力したり行動したりする必要があるものであり、人生の見本となるものでなくてはならない。

まず第一歩は、何かを行う方法を学ぶことだ(テレビのスイッチを入れる方法は数に入らない。スイッチを切る方法は入るかもしれないが)。身体を清潔に保つ習慣、食事の手伝い、ベッドの準備、洗濯、ペットの世話など家庭の雑用は、すべて学ぶことが必要だ。上手にも下手にもできるし、喜びと誇りをもってすることも、渋々といやな顔で行うこともできる。どちらの態度を取るかは任されている。それはどちらを選ぶかという選択の問題なのだ。これは古代ローマのストア派が、人類にもたらした最も優れた洞察かもしれない。世の中に卑しい仕事はない。卑しい態度があるだけで、その態度を決めるのは本人しかいない。

親は、子どもたちと一緒に働くことで、仕事の楽しみ方を教えることができる。子どもたちを励まし、その努力をほめ、自ら楽しく一生懸命に働くところを見せるのだ。また、子どもたちに実り豊かな人生を与えたいと思うなら、教育について真剣に考えていただきたい。幸福で創造的な人生の可能性は、教育の質とレベルによって決まることが多いからだ。

仕事とは達成に向けられた努力である。満足できる仕事とは、達成に向けて努力でき、しかも自らの才能と気質を発揮する価値があるものだ。ボランティアの仕事は、それが純粋に自発的であり、それを行う過程で才能を生かせるならば、まさにこうした満足をもたらす。若者にはこの種の経験が大切であり、その意味でボランティアは、仕事のよい見本なのだ。

マーク・トウェインは「人生には多くの困難があることを知っていたが、そのほとんどは起こらなかった」と言った。私たちは、恐れていることの多くが実際に起こるのではないかと想像する。愚かな臆病者にならないために、小さな丘を大きな山脈のように考えることをやめなければならない。「勇気とは、何を恐れるべきかを知ることだ」とブラトンは言う。

●忍耐

ベンジャミン・フランクリンは、『貧しいリチャード』の中で、「この世でどんな善い行いができるか、と自分自身に問いかけることほど崇高な行為はない」と説いている。「がんばり続ける!」という言葉は、困難や難局に直面する人々への励ましとなるだけではない。それは、善い行いをしようと人生に取り組む人々にとっても、有効なアドバイスなのだ。人を励まし導き、自己研鑽を積み、また日々の雑用に追われながらも、より大きな目標を見失わずに突き進み、成功をつかむには、忍耐が鍵となることを忘れてはならない。

ヘンリー・トルーマンは『回顧録』の中で、古い中国のことわざを引用して、「大統領になるのは、虎に乗るようなものだ。乗り続けなければ、食われてしまう」つまり、「大統領は、常に自ら問題を支配していかなければならない。少しでも躊躇していると、すぐに問題に押しつぶされてしまうだろう。ほんの一瞬でも、仕事の手を休めることはできなかった」と述べている。人の上に立つリーダーにとって、忍耐は欠くことのできない素養なのである。心が迷い、躊躇やためらいに決心が揺らぎ、やり遂げようとする意志を途中で失っていたら、この世の善行の数々は達成されなかつただろう。

●正直

正直であることは、人間らしく、純粹で、信頼でき、誠実であるということだ。不正直であることは、偽り、でたらめ、にせものであり、空想に生きることだ。正直な人は自分も他人も尊敬しているが、不正直な人は自分も他人も十分に尊敬していない。正直な人は、開放的で、信頼にあふれ、率直で明るい光輝く人生を歩む。不正直な人は人生において日陰、隠れ場所、逃げ場を求め、どこか暗闇を必要とする。

人間が高潔の士、厚情の人となるには、長い時間をかけた訓練と学習の積み重ねが必要だ。だがその状態になるまでに、分別があればしないことを、しかねない。嘘は隠しごとをするための安直な手段であり、多用すると塊となり、たちの悪い悪徳となる。

●忠誠

忠誠心を見れば、その人がどのような人物になろうとしているのかがわかる。忠誠心は、仲間やグループ、組織や理想などに対する変わらぬ態度を示すものだ。忠実な市民であり友であるということは、国や仲間に対してまじめな気持ちで接し、その幸福に貢献することだ。これは無批判な立場とは大いに異なり、もっと高い次元のものだ。たとえば、大統領は合衆国憲法に忠誠を誓い、政府関係者、警察官、軍隊関係者もまた憲法に忠誠を誓う。そしてアメリカ国民は、星条旗に忠誠を誓う。しかしこれらの場合、根本的なことを除けば、いくらでも意見の違いが許される。

その現れ方は異なるが、忠誠は勇気と似ており、困難な状況にあるときに一番はっきりと示される。真の忠誠心は、不自由を忍び、誘惑に耐え、攻撃にもひるまない。また、真の忠誠心から生まれる信頼は、生涯にわたり続くことが多い。

●訳者あとがき

この本の原書である「**THE BOOK OF VITURES**」は、一九九四年から九五年にかけてアメリカで二五〇万部も売れたベストセラーであるが、その後も売れ行きはおとろえず、現在ではアメリカ家庭の第二の「聖書」となりつつある。

なぜ、このような大ベストセラーとなったのだろうか？その最大の理由はアメリカ社会を席捲する「拝金主義」の反省があったためだと思う。「人生、お金がすべて」という風潮が蔓延し、貧富の差が広がり、道徳やモラルがすたれ、家庭が崩壊し沈没しそう社会…そんなときに、人生における「道徳」や「善行」の大切さを説くこの本が発売され、「アメリカを救う」と各界から絶賛されたのである。

この本は、古今東西の民話や寓話、偉人・賢人の逸話や随筆を集めている。主として欧米中心の物語構成になっているが、日本人にとっても必読の書だと思う。

日本人が読むべき理由は二つある。

まず第一に、日本でもアメリカに劣らず「拝金主義」が蔓延していることだ。それも大人だけでなく、子どもたちまでがその風潮に毒されている。人生はお金がすべてなのだろうか？そうではないだろう。もっと大切なことがあるはずだ。この本は、人間のもつ「魂」や「徳」がいかに大切かを思い出させてくれる。

第二の理由は、世界が狭くなったこと、つまり「国際化」である。もはや国境は消滅する傾向にあり、隣人を知ることがこれまで以上に大切になってきている。隣人とは韓国やアジア諸国だけでなく、欧米諸国も含まれる。そこで、欧米の子どもたちが読んで育った物語を日本の子どもたちも読み、感動を共有することは、将来における欧米とのコミュニケーションを円滑にする面で必ずやプラスになるだろう。もともと、文学や道徳に国境はない。

編者ウィリアム・ベネット氏が「はじめに」で述べているように、この本は世界に存在する素晴らしい物語の片鱗を集めたにすぎない。当然、アジアや中東の物語を中心にした『魔法の糸』も必要とされるであろうが、それは今後の課題だろう。